マルクヴァルトの「古英語のケニング」(11)（最終回）

文学部　　下瀬　三千郎

Die altenglischen Kenningar von Hertha Marquardt (11)

Faculty of Letters　Shimose, Michiro

95. 地　　獄

a）地獄は悪魔とその手下の住処（すみか）または城塞である。天国を追放された者は地獄に住むように強いられるので、「牢獄」が基礎語として用いられ、また地獄は地下にあるものと考えたので「穴」や「奈落」も基礎語に用いられる。

fēonda byrig — *Jul*. 545
helwara burg — *Rid*. 55, 6f.
dēaðsele dēofles — *Cri*. 1536
wrāþra wic(1) — *Ibid*. 1534
wrāðscrafu(2) *wrāþra gæsta* — *Rid*. 40, 41
sceaðena scræf(3) — *Sat*. 631
wearhtreaf(4) — *El*. 926
一般的な基礎語（＝「悪魔の国」）と共に
dracan fæðm(5) — *El*. 765
banan fæðm(6) — *And*. 616

---

(1) = abode of fiends
(2) = foul dens of evil spirits
(3) = pit of devils
(4) = homes of the damned
(5) = embrace of the dragon
(6) = the Devil's grasp

b）地獄は責苦の場で、そこにはありとあらゆる恐ろしいもの、つまり、暗闇・寒さ・焦熱・蛇などの存在がありありと想像される。

α）一般的な規定詞＝「罰、責苦」

witehūs — *Gen*. 39, *Sat*. 626, *Cri*. 1535
witescræf — *Sat*. 690
sūsla grund — *El*. 943, *Pa*. 59
sūslhof — *Cred*. 31
sūsla hūs — *Cri*. 1603
grornhof — *Jul*. 324
morðorhof — *El*. 1303
morþerhūsa mǣst(7) — *Cri*. 1624

β）特に恐ろしいものを規定詞に

火：
fȳrbæð(8) — *El*. 948, *Cri*, 830
fȳrloca(9) — *Sat*. 58
liges loca(10) — *Cri*. 1620, *Jul*. 474

寒さ：
windsele(11) — *Sat*. 319, 384 (?)

暗闇：
heolstorhofu(12) — *El*. 763
cf. *þa mircan gesceaft*(13) — *Jud*. (*1*), 26

蛇：
wyrmsele(14) — *Jud*, 119 (*wyrmgeardas*(15) — *Sal*. 468は

(7)＝the greatest of the houses of torment
(8)＝fire-bath
(9)＝fiery prison
(10)＝prison of fire
(11)＝windy hall
(12)＝darkness-place
(13)＝the murky creature
(14)＝hall of serpents
(15)＝abodes of serpents

文字通りに取る）

synna sēað (*Jul*. 413) は文字通りに「罪の奈落」とも、比喩的に「地獄」とも取れる。*mānhūs*[16] — *Ex*. 536を参照。

Christ and Satan の中で2回だけ使われている *windsele* はどちらの場合も、本来の *wīnsele*[17] から転写する際に 'd' を加えて修正されているが、これは察するに、*þes windiga sele*[18] (135) に従ったのであろう。Clubb (319行の注) は写字生の二重ミスはないものと考え次のように言っている。

> "The poet may have intended by this word to describe hell as the meeting-hall of the infernal comitatus, the devil and his thanes."

しかし、この場合 *wīnsele*「ワインの館」の基礎語の *-sele*「館」には、地獄の手下を示す明確な規定詞が期待されるだろう。さらに、ワインのような快適な表象と結合される基礎語が、地獄を表わすのに用いられるなんてほとんどあり得ないことである。(*dēofles drēam* — *Sal*. 44も地獄とは関係がない。この箇所の解釈は極めて不明確である)

Guthlac 1075で地獄は *dēaðsele* と呼ばれるが、*Whale* 30では「地獄」も「墓」も表わす (cf. 68)。*dēaþwic* (*Beow*. 1275) は文字通りに取る (Klaeber, *glossary:* "death-place") か、それともグレンデルが死後当然行く地獄を表わす迂言と取るかのいずれかである。*wic* を「住処」と取れば、後者の可能性が大きい。(Holthausen は「死者達の国」と取る)

全体的に見ると、「地獄」の概念を表わすケニングは、古英詩で「地獄」のテーマが好んで用いられる割には、期待する程数多くは用いられていない。宗教詩の作者達は大抵の場合地獄の恐ろしさを、唯一の型で総括するのに満足せず大変詳細に描出する。

---

(16) = home of wickedness
(17) = wine-hall
(18) = this windy hall (Hell)

96. 運　命（*Wyrd*）

Wyrd は天国と地獄の中間に位置し、変えられぬ運命に対する信仰はゲルマン人の心の中に牢固と根を張っていたが、その信仰もようやく徐々に神の全能に対する信頼に道を譲ることとなった。それでも、古英詩の中には、今なお擬人化された運命*(19)に対する昔の信仰の跡を発見する。しかし、キリスト教に対する信仰がしっかり地歩を占めれば占める程、*wyrd* は益々神に従属させられ、神と対立するものと考えられた。神の摂理は人間の運命を支配し、*wyrd* は悪い「運命」となり、その力はむしろ悪魔の力と同等となる。*(20)

古英詩には運命*(21)の概念を表わす一連の複合語があるが、そのすべては多かれ少なかれはっきりと文字通りに取るべきで、従って詩的迂言と評価すべきではない。*(22)それ故 *Salomon and Saturn* の中の有名な箇所(442 ff.)は益々人目をひく。そこでサタンはこの世の苦悩がどうして生じたのか、その起源を尋ねる。作者はここで *wyrd* を表わすために一連の迂言を用い、それらの迂言はすべての *wyrd* を悪い運命と表記する。その形式によると、純然たるケニングである。

> *Ac hwæt witeð us wyrd seo swiðe, eallra fyrena fruma, fæhðo modor, / weana wyrtwela, wopes heafod, / frumscylda gehwæs fæder ond modor, / deaðes dohtor? ...*

「しかし、強い運命 ── すべての罪の源泉、敵意の母、災の根、歎きの源泉、原罪のすべての父母、死の娘 ── は何故我々を非難するのか。」

*(19)　とにかく、大方の学者が共有しているこの解釈は次の論文の中で Alfred Wolf により激しく攻撃された。"Die Bezeichnungen für Schicksal in der angelsächsichen Dichtersprache"「アングロサクソンの詩語で運命はどのように表記されたか」(Breslau, 1919)

*(20)　cf. G. Ehrismann, "Religionsgeschichtliche Beiträge zum germanischen Frühchristendum"「ゲルマン初期のキリスト教への宗教史の寄与」*PBB* 35, p. 235ff.

*(21)　A. Wolf の上掲論文（cf. *20）及び Jente, "Die mythologishen Ausdrücke im altenglishen Wortschatz"「古英語の語彙の中の神話的表現」の Chap. iv, i. pp. 196-223で詳しく扱われている。

*(22)　迂言の *aldorlegu* 'life-law' は死と共に運命の意味も持つ。70a. を参照。

この問に対してソロモンは「*wyrd* はサタンである！」というキリスト教から見た返答をする。

結　語

先ずはケニングの形式を、その後で個々のケニングの内容を検討したので、最後に今一度ケニングの古英詩における文体的価値はどこにあるのか問題にしよう。一目で既に明らかなことは古英詩のケニングは古ノルド語のケニング、特に Skaldic Kenning のように、詩の中ですぐれた地位を占めることは到底あり得ないということである。Skaldic Kenning は詩に対して非常に強烈な刻印を与えるので、Skaldic poetry とケニングとは不可分の概念であるが、古英詩の特色はそれ程簡単ではない。何故なら、古英詩では実に様々な文体要素が互いに絡み合っているからである。古英詩の文体を特に規定するものは何かと問うとすれば、何よりも先にバリエーションを挙げねばならないだろう。バリエーションこそは古英詩で、古ノルド詩とは比較にならぬ位屡々用いられている。*(23)

第一部で既に示したように、古英語のケニングは屡々バリエーションの中に組み込まれるが、バリエーションに縛られることはなく、逆にバリエーションがケニングに依存することもない。故に、当該研究は先ずは独立したケ

*(23)　cf. Pætzel, "Die Variationen in der altgermanischen Alliterationspoesie"（*Palæstra* 48, Berlin 1913 p. 158ff.）この論文によると、詩句の総数に対するバリエーションの比率は古ノルド詩が3.5%に対して古英詩は15.1%と算出される。古サクソン語の聖書詩文学には、さらに多くのバリエーションが含まれる。他方、古高ドイツ古語はそれより遙かに少数である。故に、文学的に緊密に相互依存関係にある古英詩と、古サクソン詩はバリエーションの点で特殊な地位を占める。Heusler（'Heliand, Liedstil und Epenstil', *ZfDA* 57, 1920, pp. 1～48）は「語句の切り離しと増大に役立つ点で」"Hakenstil"（中継ぎ文体）(24)の形成とバリエーションが因果関係にあるのを証明した。（*op.cit*, p. 36）バリエーションと中継ぎ文体の両者が一緒になって、イギリスで最初に生まれ、形成された宗教的・文学的詩歌の新しい「叙事詩体」と世俗的・非文学的詩歌の「歌謡（文）体」の違いを最も明確に特色づける。

(24)＝詩行のうち長行を統語論的または意味論的に分断する文体。

ニングの方へ向かい、その後さらにケニングとバリエーションの関係へと進むのであるが、さしあたり文体的側面から両者の関係を見てみよう。

ケニングが文脈に依存しないことはケニングの本質に属することであるが、それにも拘わらず、ケニングは統語論的に組み込まれる文の一構成要素を形成する。迂言化された概念は文の内容にとって必要であるが、他方ケニングの内容、つまり迂言の根底に横たわる表象は文の内容の理解に不必要である。かくて、ケニングの内容と文の内容の両者の関係には、原則として相対立する二つの可能性が考えられる。即ち、両者が相互に調和するか、それとも相矛盾するかの二つの場合である。*(25) 前者の場合、そのケニングは「適切」と言われ、v.d. Merwe Scholtzによると、古英語のケニングの大多数は、矛盾と対照を好むSkaldic Kenningとは逆に、適切と言える。(「古英語のケニングと『エッダ』のケニングは稀に例外はあるものの、文脈にぴったり合っている。」p. 177) W. Mohr (*Kenningstudien*, p. 32f.) は条件付きで、v.d. Merwe Scholtzに同意し、*Beowulf*から一連の例証を引用しているが、その例証の中に、彼の意見では文の内容と矛盾している一連の例証も引用している。

古英語のケニングが「適切」かどうかという問題には、恐らく客観的な解答はほとんど与えられないだろう。何故かと言うと、すべてはテクストの理解と解釈次第だから。*Beowulf*から一例を取りこの問題提起をはっきりさせよう。

ベーオウルフはデネの救援に駆けつけ、怪物グレンデルから彼等を解放した。デネの戦士のうち誰一人としてこの悪魔のような敵に匹敵する者はいなかったし、人民を護る本務を持ったフロスガール王はあまりにも高齢のため闘えず、デネ自身はグレンデルに敵対出来なかった。にも拘わらず、作者は繰り返し彼を「保護者」(eg. *helm Scyldinga* — 371, 456; *folces hyrde* — 610; *eodur Scyldinga* — 663, その他) と呼ぶが、これらのケニングの使用は全く不適切、否「皮肉的」とさえ言える。しかるに、作者に皮肉が言えると信じることの出来ないのも確かだし、そこでケニングはあまりにも形式的に堕してしまい、作者は矛盾に気付かなかったのか、あるいは作者にフロースガール王を「保護者」と呼ぶ別の理由があったのか、この二つの場合が仮定される。

王侯の迂言が一部ひどく色褪せていた点は、既に王侯のケニングを扱った

*(25)　「ケニングは文脈を顧慮することなく用いられる」(Mohr, p. 32) という第三の可能性も考えられる。

時証明済みである。作者がフロースガールの演説を、*Hrōðgār maðelode, helm Scyldinga*（371他）という言葉で始める時、それは恐らく "The king spoke" というだけの意味であろう。*helm* という語は単に *Hrōðgār* という王の名に対する適切な頭韻として選ばれているのであろう。しかし、すべては必ずしも610行には当てはまらない。*gehyrde on Bēowulf / folces hyrde fæstrædne geþōht*「人民の保護者はベーオウルフの固い決意を彼から聞いた」ここでは *hyrde* は頭韻を担っていないので、この語が選ばれた理由は専ら内容からであろう。607行から610行迄、その箇所全体を比較してみよう（157頁に引用）。607行でフロースガールは *sinces brytta* と呼ばれている。成程、彼はこの瞬間には賜物を下付しない（この瞬間にはそこにはケニングは全く存在しないであろう）が、*on sālum*「仕合わせ」で（*on sālum* という句は館での歓喜との関係でよく用いられる）館の宴会に列席している。このケニングは同時に館におけるフロースガール王のイメージに誠にふさわしい他の表象を想起させる。作者は続けて言う。*gēoce gelȳfde / brego Beorht-Dena*（608-609）「輝くデネの君は助力を頼んだ」ここではもはや館における歓喜は話題とならず、フロースガール王は自分の民に対するベーオウルフの言葉の効果を考えている。その事を示唆するのは人民の名の迂言（*Beorht-Dena*）であり、この考えを以下の行が敷衍する。何故なら、人民の保護者に任ぜられている王は誰にもましてベーオウルフの言葉の効果全体を推し量らねばならないのだから。特に、人民を襲われながら回避出来なかった災難のため、白髪の王がどれだけ激しく悩んだか、作者はその前に語っていたのだから。従って、作者がフロースガールを「人民の保護者」と呼んだのは皮肉からではなく、この場合高齢が彼に人民を救うべく闘うことを妨げたにも拘わらず、彼が「保護者」であったことを強調しようとするまさしくその目的からであった。フロースガールを表わす戦士の迂言（*brand Healfdenes*[26] — 1020。Klæber では *bearn Healfdenes* となっている。*Healfdenes hildewisa*[27] — 1064）もこの解釈が正しいことを物語っている。フロースガール王は父親の存命中、つまり壮年時代に有能な戦士であったことを作者は想起させる。その彼を今戦闘に不向きにしているのは英雄的性向が欠けているからではなく、高齢だったからに過ぎないのだと人々は補って考える。*[28]

叙事詩「ベーオウルフ」のさらに他の王侯のケニングを、それらが内容上

(26) = son of Healfdene

(27) = Healfdene's leader in battle

特別な意味を持っているかどうかという点について検討するのは手の広げ過ぎというものであろう。フロースガールの迂言と、まだ王になっていない時代のベーオウルフの迂言との間に、作者は区別を設けているとだけ簡単に触れておこう。ベーオウルフは自分自身がデネの宮廷で賜物を受ける間は、「財宝を与える人」とは一度も呼ばれていない。それと全く同様に、彼はデネをそれ以上の災難から防ぐが、決して「人民の保護者」ではなく、デネの宮廷迄彼に同行した14人の同輩の単なる指揮者兼保護者に過ぎない。*(29)

補足としてさらに若干の神に関する適切なケニングの実例を挙げよう。

syððan wuldres cyning,
engla ordfruma, eorðan sohte
þurh fæmnan hrif, fæder manncynnes.
— *Fat. Ap.* 27-30

*(28)　「様々に変化する王侯の呼称は屢々それが意味とぴったり合っていない時でも、少なくとも作者の称賛の判断を含む。これに対して、作者としてはフロースガール王が演じる多少憐れむべき役割にも拘わらず、彼に多少の威厳を保たせるために、この手段が王には特に必要であった。」(Mohr, *Kenningstudien* p. 33) この Mohr の説明は筆者には多少皮相的に思われる。フロースガールは全く威厳に満ち、常に立派な王侯と記述される。しかし、とにかく彼はベーオウルフの如き例外的人物ではない。ベーオウルフが人民を救うため高齢で竜と闘うということは、その事により、さらに全く特別な意味を持つ。それはフロースガールの実例が示すように、白髪の王の自明の責務ではなく、特殊な行為であった。

*(29)　その詩の文脈中、内容上特別な意味が与えられたケニングに対しては、その一つひとつについて、第2部で何度か説明しておいた。*holmes hrincg* 'sea' — *Gen.* 1393, cf. p. 166; *holma gelagu* 'sea' — *Seaf.* 65, cf. p. 166f.; ノアの洪水 (*Gen.*) のケニングについては170頁を参照；*līfes tācen* 'sun' — *Ph.* 254, cf. p. 185; *gārsecges gǣst* 'whale' — *Whale* 29, cf. p. 189; *sumeres weard* 'cuckoo' — *Seaf.* 54, cf. p. 190; *mā ðma mundbora* 'dragon' — *Beow.* 2779, cf. p. 191; ノアの箱船のケニングについてはp. 226f. とp. 229を参照；*wǣges weard* 'ruler of the wave' — *And.* 601, 632, cf. p. 246; *burgwarena ord* 'head of the city-inhabitants' — *Hell* 56, cf. p.251

=when the King of glory, the Prince of angels, the Father of mankind, came to earth through the womb of a woman

迂言は神が天から地上に降りたことを表わしている。天の栄光が *wulders cyning* を包む。*engla　ordfruma*[30]は神と人の仲介者を指示する。（マリアへのお告げも考えられるのだろう。）*fæder　manncynnes* は完全に人間である。基礎語の *fæder*（そこでは *frēa* や *fruma* を用いても、同じく適切な頭韻を生んだであろうが）は意図的に選ばれたようにみえる。何故なら、"King of heaven" の後に "King of men" では、意味が随分弱くなったであろうから。

Sat. 562～66ではキリストは昇天し、父なる神に迎えられる。キリストを天使の主（あるじ）と称賛する神のケニングはキリストを表わす（*engla　scyppend, weoroda waldend*）が、神は *heofna ealdor*「天帝」と呼ばれる。父は息子に対して、より身分の高い王侯として迂言化され、さらに加えて、基礎語の *ealdor* は年齢が高く、知恵のある人を指示する。

僅か11行からなる The Lord's Prayer I（*Exeter*）には神のケニングが3回用いられているが、規定詞は全部 "man" になっている。神のケニングとしては、その方が規定詞に "heaven" を用いた場合より、より一層意味深く文脈と結び付く。

Sy þinum weorcum halgad / noma niþþa bearnum; þu eart nergend　wera.（2f.）
Syle us... / hlaf userne, helpend wera.（6f.）
āc þu us freodom gief, folca waldend.[31]（10）

神のケニングの場合、規定詞として一般的に優勢なのは "heaven" であり、ここではっきり認められることは、作者が文脈によりふさわしい迂言を意識的に選んだという点である。

これに対して、ケニングと文脈との間の明白な対立は稀である。恐らく、*gūðwinum grētan* 'greet with war-friends, i.e. swords'（*Beow*. 2735）

(30) = prince of angels
(31) = *nergend wera*=saviour of men
helpend wera=helper of men
folca waldend=ruler of peoples

では対立[32]が意図されたのであろう。ここでは敵意に満ちた攻撃が考えられる。(cf. p. 223) しかし対照の効果はケニングを変形して "Gelegenheits-kenning"[33]とすることによっても達成される。*gūðsele* 'battle-hall' (*Beow*. 443) (これは *bēorsele*[34]を想起させるが) は元来平和な酒宴の場として決められているが、今では戦場の役割を果たす館に用いられている。*renweardas* 'guardian of the house' (*Beow*. 770) では、ベーオウルフとグレンデルは館 (両者はまるっきり異なる目的のために館を自分の物にしようとするのだが) に対する支配権を得ようとしての戦闘において敵対者と総括される。

以上の実例から、古英語のケニングのすべてが「適切」だなどと結論づけてはいけない。ケニングの多くはその内容を顧慮することなく決まり文句として用いられる。にも拘わらず、そうなるのは大抵の場合、度重なる使用により内容が既に色褪せてしまった時に限られる。他方、個々の詩人が意識的に造語した発明のような効果を持ったケニングは頭韻や韻律のような外面的理由からではなく、何よりも先ず内容のために用いられたように思われる。にも拘わらず、その際決め手になったのは直接の文脈ではなく、詩全体の要求もしくは、さらにそれを凌駕して作者独自の見解であった。その事が特に明らかとなるのはキュネウルフの場合である。キリスト教に対する信仰心が厚いにも拘わらず、ゲルマン人の武士気質が多分無意識裡に繰り返し発現する。キリスト教の概念を表わすケニングのリストを見て欲しい。最も強く英雄詩的色彩を帯びたケニングが現われるのは、ほとんど常にキュネウルフの純粋な詩であることを確認することが出来るであろう。(eg. *gǣsta gifstōl* 'heaven')

ケニングは内容的意味及び価値的意味から屡々単純な概念の詩的昂揚としての機能を持っている。概念の中から、その瞬間ある理由から作者にとって特に重要と思われる一側面が浮き彫りにされ、その中から一つに纏まった考えが形成される。その考えはその纏まりを通して再び文の普通の水準の上に聳え立つ。従って、古ノルド語の Skaldic Poetry [そこではケニングによる名詞の代理は『原則に』迄高められる (*Meißner*, p. 19)] に対して古英語のケニングは強調された箇所にだけ用いられ、また内容上重要な概念を表

(32)＝ベーオウルフの敵を 'war-friends' 「戦友」と言ったところに対立が意図されている。

(33)＝「即席のケニング」

(34)＝ beer-hall

わすためにだけ用いられる。古英語のケニングは文中にクライマックスを形成し、迂言化された概念の方へ聴衆の注意を向ける。纏まった一文の中に二つのケニングが用いられることは皆無とは言えない迄も（cf. p. 157f.）、滅多に見受けられない。

古英語で好んで用いられたバリエーションの形を取ったケニングの使用が生ずるのもそこからである。Heusler（*ZfDA* 57, p. 32）は「この有名な文体のあやの本質」を次の一節の中に見る。

「それは聴き手が既に過去のものと信じていた概念や考えに聴き手を引き戻すことである。作者はまだ休止点に達しないうちに、既に言った事を反復する。しかも新たなバリエーションを以て繰り返す。その結果この繰り返しは論理的にも統語論的にも全く余計なもので引き離すことが出来るだろう。…この引き戻しと繰り返しの根拠は以下の通りである。即ち、作者はその対象のことで頭の中が一杯となり、一回切りの表現では必ずしも作者の感情にとって十分とは言えない。『君はその事を二回言わねばならない』…バリエーションとは先ずは表現態度である。それは現にある緊張を解きほぐす。その目的が何かということは次の問題である…」故に、バリエーションは原則として反復自体により際立った効果を挙げるために、ある概念を繰り返すだけでなく、バリエーションを使おうとする概念を形式・内容の両面から強調する表現でもある。そこで、同様に詩的に強調された言い回しのケニングも同一方向でバリエーションと同じ働きをし、両方の文体手段が文章内で結合するのは当然のことに思われる。

ケニングとバリエーションの関係について別の解釈をする代表は Ludwig Wolff*(35)である。ケニングは「普遍妥当で、類型的」なものを持っているのに、「一方、バリエーションは文脈に生命を与える、特別な個性をもたらす」から、ケニングとバリエーションは本質を異にする。さらに続けて言う。「ケニングは自足し、独立しているが、付加されるバリエーションは弱々しく説明的な働きをするだろう。…一方また、ケニングは先行の概念のバリエーションとしても役に立たない。同格の形では構成要素を総括して一つに纏めることは出来ない。」

*(35) Über den Stil der altgermanischen Poesie — *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwiss u. Geistesgeschichte*, I, 1923 pp. 214-229.

sōl varp sunnan, sinne māna,
hende hœgre umb himeni himeniœþor.
— Völusp. 5[36]

「太陽・月の伴侶は南から（北へと）水平線の周りに右手をからませる。」

ここで「月の伴侶」の両方の構成要素は文脈の中で十分な明確さを以て現われる。両構成要素が総括されて太陽という概念の補足と感じられることはない。(*Meißner*, p. 12ff.) 同じ意味を持った、若干のケニングが相接して現われることは可能ではあるものの例外的である。黄金のケニングをむやみに積み重ね羅列するのは *Bjarkamœl* の4節から6節だけである。前者は古英語にも当てはまる。名詞によるケニングの反復の効果は弱く説明的である。この事例は古英語でも珍しく、この場合はまさに説明と考えて差し支えないだろう。(cf. *hǣðstapa*[37] – *heorot*[38] — *Beow*. 1368f.) これに対して、同格としてのケニングは単一の名詞のバリエーションとして頻用され、しかもその場合には、Wolff が引用した「エッダ」からの例におけるように、迂言の各構成要素が文字通りに取られることはない。ケニングの積み重ねは古英語でも稀である（「海」と「戦」の場合だけ例証されている）が、それは恐らく、あまり長たらしく同一概念に留まれば、物語の連続する流れをあまりにも強く妨げるという理由によるのであろう。

古ノルド語においては、迂言は同格の形ではケニングと取られず、文字通りに取られる方が可能性が高いということは、多分バリエーションが比較的稀にしか用いられないことの証明になるのだろうが、そうすることにより聴き手の注意はバリエーションで述べられた事に向けられる。成程、古英詩においてバリエーションは（*Heliand* の場合のように）「原則」の域にまだ達していないが、それにも拘わらず、既に「慣習」にはなっていた。(*Heusler*, p. 36) かくて、バリエーションも「類型的」なものを得ることになる。特に最も頻繁にバリエーションの対象となった概念（王侯・神）の場合がそう

(36) = From the south the sun, by the side of the moon, heaved his right hand over heaven's rim. これは「エッダ」の冒頭の「巫女の予言」の第5連の最初の4 verses の引用である。

(37) = heath-stalker

(38) = stag

である。ある型が出来上ると、バリエーション本来の内容は後退して、言語表現における強調だけが依然保持され（強調は *Heliand* におけるバリエーションの一層の硬直化の場合には断念される）、かくて、ケニングをバリエーションの中へ挿入し、しかもそのためにケニングがケニングたることをやめることがないということもあり得る。*(39)

二語肢以上のバリエーションは先ず第一に、王侯に用いられ、宗教詩では神に用いられる。それは話や呼び掛けの中で特に頻繁に用いられ、そこでは単一の名前にも代わり得る。（Wolff は固有名詞のバリエーションこそ「バリエーションの文体手段の主たる根源」であると見なしている —*op. cit.* p.224f.）ここでは若干のケニングが直接相前後して用いられるか（eg. *Beow.* 350-352では3回、426-430では4回）、それともケニングが "substantive+epithet" と交替する*(40)かの何れかである。（cf. *Cædmon's Hymn*）これらのバリエーションが称賛の性質を持っているのは明白で、その結果としてここでは恐らく頌詩の古い形式への依存が保持されているのであろう。世俗の君主と天上の君主を表わす夥しい数のケニングは頌詩の文体的必要の結果であると説明するのは大変容易なことである。頌詩は夥しいバリエーションを持つ呼び掛けにより、それ相当の夥しい数の表現を用い、それに応じて形成された。

一方、詩の中の純粋に語りの部分、特に描写の中の純粋に語りの部分にはケニングが乏しい。例えば、ベーオウルフがグレンデルの棲む沼へ出立する約90行（1350～1440）の中には *hæðstapa*（1368）とごく少数の王侯と家来の表現以外には言うに足るケニングはほとんど出て来ない。そこでは事物の外形よりもむしろ内面的本質を指示する迂言が描写に不適当な点が同時に問題となるであろう。しかし同時に明らかなことは、「荘重な言葉」としてのケニングは「素朴な」叙事詩にぴったり合った言葉とは言えず、さらにケニングは作者の主観的見解を反映するが故に、客観的な物語の方法には適しないということである。

*(39)　v.d. Merwe Scholtz は4章で「ケニングとバリエーション」を扱っている。およそ40頁に及ぶこの章で主に扱われていることは、ケニングはバリエーションに由来するという理論である。筆者はこの解釈を取らないので、彼について詳しく述べることはこれ以上はやらないことにする。

*(40)　ケニングと「名詞＋形容辞」との交替はアイルランド詩にも現存する。古英語の宗教詩におけるこの交替の原因は、恐らくアイルランドの影響に帰せられるべきであろう。

当該研究の過程の中で、古英語のケニングと古ノルド語のケニングは広い範囲に及ぶ一致にも拘わらず、両者は本質的に異なることが証明された。各節の各研究の成果を纏めると次のようになる。

一般的に、古英語のケニングは古ノルド語のケニングより起源が古く思われる。古英語のケニングの大部分は直接的表象に遡(さかのぼ)ることが出来るし、それは想像出来るイメージを含み、実際に存在する状態を再現する。他方古ノルド語のケニングは迂言化された概念から遠く離れ、光彩陸離たる外形のため、内的表象性を放棄する。かくて、古ノルド語のケニングは隠喩的基礎語（これと迂言化された概念との関係は考えないと直ぐにはピーンと来ない）を使用したり、また多語肢のケニングを使用するようになる。古ノルド語のこの二つのタイプのケニングの発展は原則として古英語のケニングとは無縁のものである。

恐らく、同様に説明されるのは古ノルド語の詩に神話的ケニングが豊富なのに対して、古英語の詩にはそれが皆無であるという事実である。古英詩にも元来神話的ケニングがあったのだが、キリスト教への改宗後は、もはや使用されなくなったと推測されてきた。しかし古英語がかつて神話的ケニングに富んでいたと仮定してはいけない。さもなければ、多分もっとその痕跡が残っている筈だから。現在の古英語のケニングは決して特別な知識を前提とすることなく、また決して詩人の「隠語」でもなく、常に自ずから説明出来るものばかりである。成程、*hildplega*「闘いの戯れ」や*hildewōma*「闘いの歌」のケニングは、本来神話的な意味を持っていたと考えられるが、しかし迂言を理解するために知っていなければならない一定の神話と結び付いた古英語のケニングがかつて存在していたとは考え難い。

さらに、古英語のケニングは他の詩歌との関係が遙かに強い点でも、古ノルド語のケニングより起源が古いように思われる。古ノルド語のケニングは詩歌に依存することなく、言わば独立的存在を保持したかの印象を往々にして与える。「型」自身が増加し、新しい形式を派生する。型こそスカルド詩人の「隠語」を理解する鍵である。多語肢から成るケニングを基本形に還元すると解釈が与えられたことになる。ケニング外の文脈はほとんどあるいは全然問題とならない。古英語はこのような絞切り型(ステレオタイプ)を持つ範囲は限られており、それを破ることによりテクストに特殊な効果を狙える時にはいつでも破ることさえ出来る。新種の迂言が常に創造される一方で、古ノルド語の詩は常に同一の型に新しいバリエーションを与える。かくて古英語のケニングは古ノルド語のケニングと比べて遙かに「即興詩」(41)的色彩が強く、これらは

他の詩との関係で創造されたので、多かれ少なかれ文脈に依存する。

古ノルド語のケニングは一つの表象から他の表象への飛躍を好み、従って結局ケニングは才気煥発な遊戯となる。「戸惑うような、新しいケニングの造語の多くが聴き手に与えた効果は、ゲーテ式のトロープ(42)のような詩的ヴィジョンとしてではなく、巧みな機知としてであろう」（*Rec. Meißner*, p. 133）と Heusler が言う時、彼の主張は正しいのかもしれない。この点も、古ノルド語のケニング、特に Skaldic Kenning と古英語のケニングの間には本質的な違いがある。（Eddaic Kenning はこの点 Skaldic Kenning より古英語のケニングに近い、と言うことが出来る）とにかく、古英語のケニングは巧みな機知というより、むしろゲーテ式トロープに等しく、才気煥発な遊戯であることは少なく、詩的ヴィジョンを示すことが多い。Skaldic Kenning は屡々、何はさておき第一に（機知のように）悟性に訴える。詩の一節の意味を理解することは謎を解くこととほとんど同じ意味を持った。アイスランドのサガがこの若干の実例を提供してくれる。古英語のケニング ── そして一部は「エッダ」のケニングも（例えば、Mohr の解釈の中にある古い *Helgilied* からの美しい実例を参照のこと ── *Kenningstundien*, p. 59）── はより強く感情に訴える。古英語のケニングはその響きの中に含まれる表象を通して一定の印象を喚起しようとし、あるいは一定の情調を生み出そうとする。作者は聴き手に謎を解かせようとするのではなく、詩歌を追体験させようとする。

古英語のケニングは古ノルド語のケニングより起源が古いにも拘わらず、それは古ノルド語のケニングの前段階と取るべきではない。両者の違いは単に年代的に評価すべきものではなく、背景には考えの違いがある。異なった考え方とは結局アングロサクソン人と古期スカンジナビア人の性質の違いに根ざす。この両者の違いが非常にはっきりと顕われるのは、恐らく全体の対照の場合よりも、ケニングのグループの個々の対照の場合であろう。*(43) 例えば、両民族の海のケニングを挙げてみよう。アングロサクソン人の場合、海の支配的表象は波立ち騒ぐ海の狂暴さ、つまり「大浪との闘い」であるが、この表象は北欧には例証されていない。北欧では、海は先ず「船の道」と理解されるが、このように身近に考えられるケニングは古英詩には見られない！この事から北欧人はアングロサクソン人より海に親しんでいたことが推定出来る。この点は後代にはいり、海の支配者となるのがアングロサクソン

(41)　Gelegenheitsbildungen=occasional formations

(42)　trope（転義的）文彩、言葉のあや

人の方なので益々目を惹きつける。いずれにしろ、初期の中英詩は古英語のケニングの中に見られる海への畏怖を誠に露(あらわ)に示している。航海に危険はつきもので、従って航海はなるだけ回避される。*(44) この中英語の気分は従来は理解されなかった。何故なら、古英詩では海は大きな役割を演じており、航海はゲルマン人にとって、古来、親譲りのものであったから。このようにケニングの諸相を考察して分かることは、中英語期の発展は古英語時代に既に始まっていたということである。ここではケルトの影響が感じられるようになったのであろうか？

明確な相違点は、特に両民族のケニングに対するキリスト教の影響に現われる。古ノルド語のケニングは一般に古い異教的性格を保ち、ケニングの体系の中へ採用されるキリスト教的造語はごく少数に過ぎない。他方、古英詩は大変強いキリスト教の影響を直ちに示す。確かに、古英詩はキリスト教の概念、例えば、「神」を表わすにも、古いケニングの形式を利用するが、しかし、内容的には新しい教義に極めて強く規定される。古い形式と新しい内容の融合はあまりにも深くかつ内面的なものであったので、古英語の詩語は独自の内容を持つ新しい神の表示を創造出来たし、これら新しい神の表示は爾来他のゲルマン民族にも引き継がれることになる。これに対して、古ノルド語の詩はさらに長い間、古い異教的ケニングの型に執着した。*(45)

従って、ケニングの歴史の結果は古英語のケニングが古ノルド語のケニングより全面的に古い形式を表わすと理解してはいけないし、さらに両ケニングを語り伝えてきた言葉がゲルマン語の方言として並存しているように両者もまた並存している。古英語のケニングが古ノルド語のケニングより、ゲルマン語のケニングの原型に近いのは確かであるが、古英語のケニングも古英

*(43)　v.d. Merwe Scholtz は5章で古英語のケニングと古ノルド語のケニングの個々の対照をリストの形で提供している。この概観は信頼出来ないので、もっと確実な基礎に則した新たな対照が恐らく望ましいのであろうが、ここでは断念せざるを得ない。何故なら、古英語のケニングと古ノルド語のケニングの細目に亘る対照は当面の研究の枠を逸脱するであろうから。しかし、2部では Meißner の区分が大体において保たれ、その上に、すべての比較的重要な箇所では、それに該当する Meißner の場合の詩の一節への言及がなされている。その結果、個々のケニングの比較は容易となる。

*(44)　cf. R. A. Kissack, "The Sea in Anglo-Saxon and Middle-English Poetry" (*Washington University Studies*, XIII 1926)

詩の中で我々に伝承された最も古い証拠、即ち *Cædmon's Hymn* の中に既に完成した文体形式として登場している。我々は古いノルド語のケニングからも、古英語のケニングからも、ゲルマン語のケニングの初期の形態がいかなるものであったか知る由もない。

しかし、今や我々は古ノルド語より古英語の中に、より古い印象を与えるケニングを持っている。この古い印象を与えるケニングはケニング自体が本来発生したと同様の方法で生じたと仮定しようとすれば、ケニング自体は事物の直接経験から事物の表現として高尚な言葉で表わされたことは大いにありそうなことである。事物の本質を言葉で把握することは、古来詩人の使命であり、古英詩に保持されているケニングは最も本来の詩的表現と言える。しかし、ケニングの根源が詩の中に求められるか否かということは別問題である。Wolfg. Krause は最も古いルーン文字の碑銘の呪術的・詩的槍の表示をケニングの前段階と見なす。*(46) これらの槍の表示［eg. *tilarids*「攻撃するもの」(Kowel)、*ranja*「突進するもの」(Dahmsdorf)、*gaois*「ブンブンいうもの、どよめくもの」(Mos)、*raunijar*「ためすもの」(Œvre Stabu)*(47)］は詩的に見れば、槍の本質の表現としては内容上、古英語のケニングと明白な一致を示し、従って恐らく美しい前段階（この前段階の中にはケニングを特色あるケニングの形式として完璧たらしめるのに欠けるものは何一つなかった。何故なら、これら槍の表示は形式上一語肢だから）を表わすことが出来るのだろう。しかし、この一語肢は Heiti における一語肢とは異なる。何故なら、そこにあるのは命名ではなく、ケニングの基礎語に

*(45)　古英語のケニングと古サクソン語のケニングを比較しても、古英語のケニング研究にはほとんど意味がない。何故なら、古英語のケニングはほとんど専ら与える側であったから。従って、この事はこれ以上立ち入って論じないことにする。古アイルランド語のケニングとの比較の方がもっと重要であろう。何故なら、両者には相互影響が見られるから。しかし、この領域はまだほとんど研究されていず、その結果、その種の比較も今日まだ行われていない。古英語のケニングと古アイルランド語のケニングの個々の間に見られる一致と類似、また両詩歌のケニングの使用における一致と類似が指摘されたのも個々の場合だけだった。(cf. pp. 133, 154, 158, 244, 257f., 313, 315f.)

*(46)　Framea「槍」in: Germanen und Indogermanen — *Festschr. f. H. Hirt*「H. Hirt 記念論文」, Heidelberg, 1936, Vol. II, p. 587

おけると同様に本質の表現であるから。槍の表示は動作主名詞としての形式の点でも基礎語に等しい。槍は後代のケニングの中で剣が「光るもの」であるのと同じく「走るもの」あるいは「ブンブンいうもの」である。槍がその性質を戦で証明しようとするのは自明のことであり、その事を言葉に出して言い表わそうとすれば、ケニングは完璧になるであろう。

ケニングの二語肢は上で示されたように、迂言が文脈から独立していることを前提条件とする。基礎語は規定詞により意味が一定する。ケニングはそれ自身纏まった考えとなる事物の呪術的・詩的表示が詩の中に取り入れられ、従ってより大きな文脈の中に組み入れられた時に初めて、多分この形成が必要だったのであろう。事物の呪術的・詩的表示を他の文から特別の構成要素として際立たせようとすれば、表現の内的纏まりが必要であったし、同時に二語肢が必要であった。恐らく、ケニングの二語肢と頭韻詩の二拍子は内面的関係に立っているのであろう。Heusler（彼はLeo, v. Liliencron, Müllenhoffに賛同した。cf. Hoops, *Reallexikon IV*, p. 236f.）はルーン文字の神託から頭韻詩へと発展したと見る。頭韻詩は予言詩と呪文詩から始まり、その後は他のジャンルにも使われるようになったということである。かくて、ケニングの形式・内容共に、結局は恐らく呪術的・詩的なルーン文字の解釈の領域に根ざすことはあり得ることである。そこで、ケニングとは詩同様「精巧なルーン文字の結合」：*searorūna gespon*[48]である。

*(47)　cf. Wolfg. Krause, "Runeninschriften im älteren Futhark", Halle 1937, *Schriften d. Königsberger Gelehrten Gesellschaft*, Geisteswiss. Kl. XIII, 4, p. 441ff.

(48) = web of mysteries

あとがき

ヘルタ・マルクヴァルト女史が1938年に発表した *Die altenglishen Kenningar* は半世紀を越えた今尚、古英語のケニング研究の古典として色褪せることなく、高い評価を得ていると思われる。古英語のレトリック一般に強い関心を懐いていた私がこのドイツ語の原書から最初に翻訳・注解の形でこの本を紹介したのは1972年（昭和48年）８月１日発行の熊本商科大学と短期大学の合併号の30周年記念論文集誌上であった。

翻訳といっても、いわゆる翻訳とは違い、すべてを日本語に直したものではない。ケニングという研究対象の性質上及び読者属を考えた場合、夥しい数の古英語のケニングの実例のうち難解と思われるケニングについてだけ現代英語に直した。また、ケニングだけでなく、ケニングを含んだある程度長い詩文の場合も現代英語に直し和訳は与えなかった。さらに研究書の中で引用された他の研究家の文章が英文の場合はそのまま英文を残しておいた。

1972年の第１回目の紹介以来、仕事の合間をぬって少しずつ発表していたが、1979年（昭和55年）１月の第４回目の発表以後、中断が続いた。長い休眠から目覚めて第５回目の仕事を再開したのは1990年（平成２年）３月、熊本女子大学学術紀要第42巻誌上だった。

そして今回の第11回目を以てやっと完結の運びとなった次第である。ゲルマン人特有のあの実証主義は徹底しており、理論の肉付けとしての用例は実に豊富なものがある。それにしても完結するのに20年余も費したと聞けば、亀さんならずともあまりのマンマンデ振りに呆れることだろう。

最後に、ドイツ語で助言を頂いた元熊本女子大学教授の今は亡き田代四郎先生の霊前にこの拙い翻訳・注解を捧げ、先生のご冥福を心からお祈りしたい。

平成６年10月30日記